

岩手医科大学歯学会第49回例会抄録

日時：平成12年2月26日（土）午後1時

場所：岩手医科大学歯学部第四講義室（C棟6F）

特別講演

ボストンにおける3大学歯学部を研修して

塩山 司

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

平成11年7月17日より11月30日まで4.5ヵ月アメリカ・ボストンにリサーチのため出張しました。リサーチをはじめる前の審議・承認を得るまでの話と、ボストンには歯科大学が3校あるので、見学できたボストン大学歯学部補綴学大学院、タフツ大学歯学部歯周病学大学院、ハーバード大学歯学部補綴卒後研修の臨床を中心に各専門医を教育する現場や学生教育の実際を報告した。

ボストン大学歯学部でのリサーチの内容は「天然歯の色調構築におけるシェードガイドおよび新しい測色法の評価」で、ボストン大学歯学部の Restorative Sciences と Biomaterials の Dan Nathanson 教授等との共同研究でした。人を対象とした研究のために IRB（研究倫理委員会）へ申請書を提出し、審議・承認を得て Human Research の実施許可を得るまでの手続きの紹介をした。

また、ボストンの3大学の歯学部で見学研修が出来たので併せて報告した。

ボストン大学歯学部補綴学大学院、タフツ大学歯学部歯周病学大学院の確立された教育システムと臨床内容を中心に紹介した。

各大学とも文献レビューで基礎から臨床まで多くの文献をカバーし、特に診断や病因論に多くの時間が割かれていた。ケースプレゼンテーションも非常に多く、講座間治療計画セミナーでは補綴と歯周が主体となり、関係する他科の先生方も参加し活発な意見交換がなされ、治療計画を支持する根拠について精通していることを求められていた。ハーバード大学歯学部は少人数の大学で1学年40人程度で、全員を集めた講義はなく、8人を一グループとしたやり方で、少人数で講義や実習を行ない効果的な授業が特徴的であった。

学生は講義や実習後に、図書館へ行き、課題のレポートをまとめて翌日の朝に提出ということであった。どの大学も、非常勤の先生方が教育に直接携わり誠意を持って学生を指導していたのが目に映った。

演題1. コホート調査にみる幼児の母親の意識変化と保健行動の関連性

○相沢 文恵, 阿部 晶子, 岸 光男,
米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

乳幼児の母親に対する歯科保健指導における問題は「知っていることと実行することは別」という母親の意識と行動のずれを修正するために医療従事者がいかなるサポートをすべきかということである。本研究では効果的に保健指導を実施するために必要な要因を探るため、母親の意識と態度に関するコホート調査を実施した。

1996年8月に1歳6か月児健康診査を受診し、1998年4月に3歳児健康診査を受診したコホート集団122名の母親を対象として、乳幼児の食習慣や日常生活習慣、母親の歯科保健に関する意識等に関して質問紙調査を実施した。

その結果、「虫歯予防に対する砂糖の摂取制限の必要性」に関する意識が変化しており、1歳6か月では必要だと思っていたが、3歳では不必要と思っている群（N=28, A群）で最も低いdft（ 0.46 ± 1.3 ）を、1歳6か月でも3歳でも不必要だと思っている群（N=31, B群）で最も高いdft（ 3.42 ± 5.2 ）を示し、2群間に有意差が認められた。また、砂糖の摂取制限の必要性の有無と実際の甘味制限の実行の頻度を χ^2 検定を用いて分析したところ有意差はなく、意識と行動のずれが認められた。ついて、Wilcoxon検定の結果、A群では「甘味制限による子供の心の発達への影響」を3歳で強く思っており、この群は他の群に比較して「仕上げ磨き」を実行している割合が高かった。また、B群に関しては「虫歯に対する親の力の無力感」を3

歳で強く感じており、この群は他の群に比較してかかりつけ歯科医師を有する割合が高かった。

これらの分析結果から、歯科保健行動における意識から行動への流れを妨げるのは、「セルフケアの無力感」であり、それを補うためにのみプロフェッショナルケアを受けている可能性が示された。このことから、う蝕予防に対するセルフケアとプロフェッショナルケアの重要性が同等であることを1歳6か月児健診時で母親に指導することが必要であることが示された。

演題2. クロルヘキシジン配合歯磨剤を用いたバス法による口腔ケアの検討

○清水 真澄, 稲葉 大輔*, 米満 正美*

岩手医科大学医学部附属病院集中治療室 (ICU), 歯学部予防歯科学講座*

【はじめに】

呼吸器合併症のなかの誤嚥性肺炎は、多くの口腔内細菌が原因となっていると言われている。当集中治療部では、1日3回30倍イソジンガーグルによる清拭と市販の一般歯磨剤を使用し口腔ケアを行っていたが、舌苔や口臭の改善はみられなかった。そこで、抗菌持続作用のあるクロルヘキシジン配合歯磨剤(プロクト・サンスター®)を用いたバス法による口腔ケアを検討した。

【方法】

1. 対象: 集中治療部に入室中の有歯顎者30名(22~87歳)を、従来の方法によるケア群15名(以下従来群とする)と、従来のケアに加えクロルヘキシジン配合歯磨剤を用いたブラッシングによる口腔ケア群15名(以下テスト群とする)の2群に分けた。

2. 期間: 平成11年6月~9月。

3. 方法: 従来群とテスト群において独自に作成した口腔ケア評価表に基づき口腔内の状態を評価した。細菌の判定には、主にグラム陽性菌を調べるRDテストとカンジダを調べるストマスタットを用いた。

4. 分析方法: 従来群、テスト群について口腔内の状態、細菌レベルの改善を比率で比較した。

【結果】

1. 口腔内の改善率は、舌苔では従来群31%、テスト群53%に改善を認めた。口臭は従来群36%、テスト群82%に改善を認めた。乾燥は従来群25%、テスト群33%に改善を認めた。

2. 口腔内細菌の改善率は、RDテストは従来群31%、テスト群77%に改善が認められた。ストマスタットでは従来群は改善なく、テスト群60%に改善が認められた。

【結論】

本研究において従来のケアでは、口腔内細菌を減少できていなかったと考える。口腔状態の改善や、RDテスト、ストマスタットの結果より、今回検討した口腔ケアは、清掃効果が高く誤嚥性肺炎の原因となる口腔内細菌の減少に有効であることが示唆された。

演題3. シュワン細胞基底膜の凍結超薄切片法による観察

○大澤 得二, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

基底膜には大きく分けて二つのタイプがあると考えられる。(1)表皮や粘膜上皮の基底膜のように半接着斑やアンカリング・ファイブリルなどの装置が発達し、lamina densaが厚いものと、(2)シュワン細胞、血管内皮、筋の基底膜のように半接着斑やアンカリング・ファイブリルの発達がなく、lamina densaが薄いものである。前者を化学固定の後、凍結超薄切片法により透過電顕的に観察するとlamina densaが厚く見えることが知られている。同じ方法で後者の基底膜であるシュワン細胞基底膜がどのように見えるか観察した。ウイスター・ラットの顔面神経を4%パラホルムアルデヒドで2時間固定した後、氷晶防止のため20%ポリビニルピロリドン-1.8M ショ糖に置換、ライヘル社KF-80急速凍結装置で凍結、さらにライヘル社ウルトラカットFCSで超薄切片を作成した。切片は2%ポリビニルアルコール-0.2%酢酸ウランによって重金属染色と包埋をすることによってネガティブ染色し、日立H-7100又はH-7100S透過型電子顕微鏡で観察した。顔面神経の一部は通常の固定、脱水、包埋操作を加えた後、透過電顕的に観察した。対照のため下唇の皮膚をエボン包埋による方法と凍結超薄切片法で観察した。凍結超薄切片法ではネガティブ染色で観察するが、切片が元々持つ電子密度と入りまじるため、ポジティブ、ネガティブが入りまじる像となった。髄鞘がよく形態を保持し、層の乱れはなかった。神経内膜はコラーゲン線維で充たされていた。シュワン細胞基底膜のlamina densaは特に厚く見えることはなかったが、lamina lucidaが認められず、lamina